

マルクス、スペンサー、デュルケームによる 社会的分業の分析——否定的結果編

小 原 一 馬

Negative Consequences of Division of Labour
— Marx, Spencer, and Durkheim —

KOHARA Kazuma

序

「国富論」(Smith 1776)におけるアダム・スミスの古典的研究以降、社会的分業は、多くの著名な社会学者達の共通テーマとなってきた。こうした彼らの分析対象の共通性は、現在のわれわれにとって、彼らの全体的な理論的視角の相違点や共通点を明らかにする上で、最高の条件を与えてくれる。本稿においては、そうした分業についての古典的な理論の中でもカール・マルクス、ハーバート・スペンサー、エミール・デュルケームの分業に関する理論を取り上げ、彼らによる社会的分業発達の否定的結果の分析の比較検討を通し、Parsons (1937)に代表されるような収斂的社会学史観の限界を明らかにする。

本稿は小原 (1997a), (1997b) とともに、マルクス・スペンサー・デュルケームの分業論のはじめての包括的な比較研究である。これまでに、Jones (1974), Perrin (1975), Corning (1982), Boudon et Bourricaud (1984), Turner (1985), Borlandi (1993), Perrin (1995) といったスペンサーとデュルケームの分業論の比較や、Cuvillier (1948), Lukes (1967), Giddens (1971), Alexander (1983), Heredia (1986), Knapp (1986), Hughes et al. (1995), 佐々木 (1996) といったマルクスとデュルケームの比較はたびたび行われてきた。これらの比較研究に共通する主な欠点は、デュルケームの分業理論の、『社会分業論』(1893)以降の発展を十分なかたちで取り扱っていないことにある。特に本稿の関心からいえば、分業そのものの影響に否定的側面を一切認めない『社会分業論』における立場から、アノミー発生への間接的関与といった否定的側面を認める『自殺論』(1897)における立場へのデュルケームの移行は決定的であり、無視してはならないはずである¹⁾。

ただし、このような欠点があるものの、近年のスペンサーとデュルケームの分業論の比較研究は、スペンサーの分業論のゆがめられたイメージを払拭し、より正しいものにおきかえる上で大きく貢献したのも間違いない。Parsons (1937) 以来「楽観的進化主義者」というスペンサーに与えられているレッテルは、現在でも社会学史の教科書に目にする事ができる。例えば、新睦

人他(1979)は、「リアリティの欠けた社会理論」という節のなかで、スペンサーを次のように紹介している。

産業社会の暗い部分に気づいていたコントに比べて、スペンサーの場合は……功利主義的で明らかに古風な自由主義の旗印を掲げていた。……〔当時〕ロンドンは相次ぐ恐慌の中で、貧困問題が深刻化していた。……その中で適者残存を説く彼の「社会進化」学説が楽観的なトーンで語られたことは、全く奇妙なことであった(6-7)

新睦人はこのように述べ、スペンサーを産業主義の「イデオログ」ないし「道化師」と呼んでいる。しかし現実にはPerrin(1995)の指摘するように、スペンサーは分業の進展がもたらす負の影響にも着目していた。実際、マルクスやデュルケームが「疎外」や「アノミー」という概念を通じてそうした分業の負の影響を理論化したように、スペンサーもまた、そうした分業の負の影響を「社会進化の(避けられぬ)犠牲」として理論化しているのである。

このように、本稿における分業論の比較分析は、先行比較研究の蓄積を待って、はじめて可能となった。それでは、以下マルクス、スペンサー、デュルケームの分業の否定的影響に関する理論をそれぞれ順番に分析していき、その後三人の理論の比較を行おう。

マルクスの「いわゆる疎外」の概念

マルクスにとり、分業は「いわゆる疎外」の源泉以外の何物でもなかった(『ドイツ・イデオロギー』Marx and Engels 1846邦訳40-47)。もっともこの図式は、廣松(1969)も指摘するように『ドイツ・イデオロギー』以降の後期のものであって、マルクスが「疎外」について最もまとまった論述を残している『経済学・哲学草稿』(1844)では、「疎外」は説明すべき現象としてではなく、一つの説明原理として利用されている。すなわちここでは、疎外という現象が、分業という特殊な社会的生産関係によって説明されるのではなく、むしろ、分業が、疎外によって説明されるのである。

また『経済学・哲学草稿』から『ドイツ・イデオロギー』にかけての、「疎外論」から「物象化論」の転換以降、後期の著作では「疎外」という言葉は原則として避けられている。にもかかわらず、「疎外」と呼ばれない「いわゆる疎外」の現象はマルクスの関心を捉え続けているといえる。ギデンス(1971)も指摘するように「この疎外という概念が、マルクスの爛熟期においても根幹をなし続けていたことは全く疑いようがない(邦訳21-2)」⁹⁾

そこで、本節では、ギデンスの解釈を基本的に踏襲しつつ、『経済学・哲学草稿』(1844)で述べられる、現象としての疎外の四つの側面、すなわち、生産物からの疎外、生産過程からの疎外、他者からの疎外、そして「類的存在」からの疎外(邦訳84-106)を、後期以降の史的唯物論的観点からごく簡単にまとめてみる。詳細な分析は、三者の理論の比較の節にまかせよう。

まず生産物からの疎外という側面から。これは分業の否定的影響の経済的・物質的側面であり、これが疎外の他の側面の基礎とされている。

社会において分業が発達するにつれて、労働者は生産物から疎外される。彼らはより多く生産すればするほど彼らの所有する物はより少なくなるというのである(Marx 1844邦訳86)。分業の発達に応じて彼らがより多く生産し、彼らの生産手段としての効率性が増せば増すほど、より

多くの労働者が（再）生産され、彼らへの需要に比して、労働者が過剰供給されるようになる（Marx 1844 邦訳 22-23）このように分業の発達に従い、全体としての生産力はあがっていくのに、労働者は、物質的・経済的に貧しくなる。これが第一の側面である。

次に生産過程からの疎外という側面について検討しよう。

この生産過程からの疎外という側面は、「労働が目的そのものではなく、単なる手段に過ぎない」といった、あるいは「働いている間、他者に従属せねばならない」といった種類の、労働における「不幸せな感じ」をあらわしているとされる（Ibid.：91-92）。アダム・スミスらの国民経済学においては、労働の本質とみなされるこうした特徴を、マルクスは、分業による疎外の結果だと考えるのである（Ibid.：103）。こうした心理的苦痛が現象としての疎外の第二の側面である³⁾。

次に現象としての疎外の第三の側面、すなわち「類的存在からの疎外」について見よう。この側面は、個人が利己的目的を達する手段として、社会のみせかけの共同利益のためにふるまうことが、結果的に社会全体の利益を損ない、その社会のメンバーである当の個人も不幸になるという、一種「良心的な」囚人のジレンマ的状况を指している。具体的には、人々の相互依存が深まることを指していると考えられる。

さて、この「類的存在」という概念だが、マルクスは、フォイエルバッハ（1841）の与えた「類的意識」という概念、あるいは「類的意識」を備えた「類的存在」という概念の定義から逸脱することなく、しかしフォイエルバッハとは違った文脈でそれらの概念を用いている。マルクスは、「類的意識」こそが人間の本性を定める以上、人が「類的存在」として、すなわち「社会的存在」として意識的にふるまうときにのみ、人が本来のなかたちで生きているのだと主張し、フォイエルバッハ以上に、人間の社会的側面を強調したのである（Marx 1844 邦訳 133-5）。もし労働が疎外されていなければ、人々は自由な類的存在として、自由な社会的存在として、自分自身のために生産することができる。社会は社会のために人が生産することを強かず、その人の生存に対する脅迫は存在しない。ここには個人の生と、類としての、すなわち社会的存在としての生との間に、矛盾がないのである。しかし、分業が発達するにつれて、個人と社会の間に矛盾が発生してくる。個人の生は類としての生から疎外され、類としての生が個としての生の手段となってしまう（Ibid.：96）。すなわち社会の欲求を満たすことが、個人の生存の手段となり、相互依存の中で自由を失うことになる。『ドイツ・イデオロギー』では、マルクスはこの矛盾を、特殊利害と共同利害との分裂として表現している。

分業と同時に、個々の個人または個々の家族の利害と、たがいに交通する全ての個人の共同利害との矛盾が与えられる。……労働が分配されはじめるや否や、各人は一定の専属の活動範囲を持ち、これは彼に押しつけられて、彼はこれから抜け出すことができない。彼は猟師、漁夫か牧人か批判的批判家かであり、そしてもし彼が生活の手段を失うまいとすればどこまでもそれでいなければならない（Marx and Engels 1846 邦訳 43-4）。

ここで特殊利害と共同利害の矛盾の一例としてあがっているのは、人々が個人として生き延びるために、全体としての相互依存を深め束縛しあうことであるが、その矛盾はまた、特殊利害に基づいた、他者の欲望を喚起する投機が、人々の商品や貨幣への依存を深め、他者をより貧しくさせ、共同利害を損なうこととしても現れる（Marx 1844 邦訳 149-150）。しかし、『資本論Ⅰ』

(1867)での商品のフェティシズムに関する議論(邦訳 第一分冊129-151)に従えば、こうした商品や貨幣への依存も結局は他者への依存の反映であるといえよう。

では、最後に現象としての疎外の四番目の側面、他者からの疎外について見ていこう。これは、分業の敵対的階級形成という影響を指している。

『経済学・哲学草稿』(1844)でマルクスは、疎外の他の三つの側面について述べてきた後、「もし私自身の活動が私に属しないとすれば……、その時それは誰に属しているのか(邦訳99)」と問う。現実の人間関係に答えを求めるマルクスにとってその回答は、「その労働者以外の他の人間(Ibid.:100)」以外にありえない。これは当然資本家階級を指す。しかし、マルクスはこうに述べることで、資本家階級が労働の疎外過程を支配するとか、彼らが疎外過程から自由であるということの意味したわけではない。そうではなく、分業の発達の結果、労働者階級と資本家階級がたがいに疎外された敵対的關係になるというのである。「疎外された労働を通じて、人間は生産の対象や行為に対する彼の関係を、疎遠なそして彼に敵対的な人間に対する関係としてうみだす(Ibid.:101)」⁹このように、分業は、潜在的な階級闘争を引き起こす。これが現象としての疎外の最後の側面である。

さて、こうして見てきたように、マルクスは分業のこうした否定的側面のみを重視し、しかもそうした否定的影響が分業の必然的結果だと考えた結果、その解決として分業の廃棄を提起した。しかしまた、彼はその廃棄が、分業がもっとも発達し生産力が頂点に達して、労働者の疎外が極限にまですすんだときに、はじめて可能になるとも考えていた(Marx and Engels 1848 邦訳46)。すなわち、分業のこうした否定的側面は、同時に肯定的側面をも形成していたのである。

スペンサーの「社会進化の犠牲」という概念

同じイギリスの社会思想家ミルやベンサムとともに、功利主義者としてしばしば分類されるスペンサーだが、彼は分業の及ぼす効果の否定的側面を見過ごすほどナイーブではなかった。実際彼は、マルクスが疎外としてあげた四つの側面のうち、経済的側面以外の全てを観察している。分業の発達を介した社会進化が、平均的にいって個人にとり良きものであり、そうでなくてはならないと彼は信じていたが、それと同時に、全体の幸福のために一部の個人が犠牲になっていることにも、彼は気づいていたのである。社会進化の比較的後の段階において、その犠牲は労働者に集中する(Spencer 1896=1975:514)。

こうした社会進化の犠牲に関し、マルクスが分業による否定的影響としてみとめたもののうち、経済的側面以外のすべて、すなわち心理的側面と、相互依存と闘争という社会的側面を、スペンサーもまた分業の否定的影響として認めた。そして、それ以外に、単純労働にともなう肉体的・精神的能力の低下を認めている。

〔機械の発達と自動化の結果、それを使う〕労働者自身が、比較的自動的になる。単調な注意が必要とされると同時に、神経の特殊な部分を酷使し、しかもその特殊な部分以外は使われなくなって、〔精神的に〕積極的かつ消極的にダメージを受ける。こうして精神的に隠れたかたちで「片端」にされると同時に、また肉体的にも退化が進むのである(Ibid:515)しかも、こうした作業の「専門化」による精神的・肉体的特殊化の結果、労働者は、契約的に

はいかに自由であっても、実質的には職業選択の余地さえない。

確かに工場労働者は、その意志で契約を結び、また短い予告で契約を解消することができるという点では、完全に自由ではある。……しかし、その自由は結局のところ、ある奴隷的作業を他の作業に変えるという程度のものにすぎない。なぜなら適する仕事、特定の仕事に限られてしまうため、ほとんどの場合、彼に決められるのは、その単調で退屈な日々の大半を、どの工場で過ごすのかということだけだからだ (Ibid: 516)

このように、マルクスが「類的存在からの疎外」として述べたこととは、また違ったかたちで、スペンサーもまた労働者が分業の産み出す相互依存によって、多くを失うと考えたのである (— 相互依存的側面)。

もちろんこういった状況が、労働者にとって心理的にも喜ばしいわけではない。イギリス功利主義の伝統にしたがって、「個人の幸福は、その全ての才能の活用にある」(Spencer 1851: 15) と考えるスペンサーにとって、こうした状況におかれた労働者が幸福であったと考えられるはずもなからう (— 心理的側面)。

ところでスペンサーにとり、この「犠牲」は、分業発達ないし社会進化の原因であり結果でもある競争の、副産物にはかならない (— 闘争的側面)。マルクスはこうした労働者の犠牲は、未来における分業の廃棄によって埋め合わされると考えたが、スペンサーはそれが必ずしも労働者階級において埋め合わされるのではなく、こうした「犠牲者」以外の社会成員全体が、社会進化によって現在あるいは未来に得るなにかによって埋め合わされると考えた。この労働者の「犠牲」は競争の結果であり、競争には常に敗者がつきものなのである (Ibid.: 516)。

ここでスペンサーは彼の信奉する「適者生存」とそれを通じた進化の法則を、社会にあてはめている。デュルケームやマルクス同様、スペンサーもまた、闘争そのものは良くないものだと考えている。これまでの引用部分を見ても、スペンサーが、パーソンズのいうようには少しも「楽観的」ではないことは明かだろう。闘争はとても大きな犠牲をとまっている。それをスペンサーはよく知っていた。しかし、マルクスが闘争を闘争的状態の止揚のための手段として認めるのと同様、スペンサーもまた、闘争をよりよい社会への手段としては認める。とはいえ、マルクスとスペンサーの考える、よりよい社会は、大きく異なっている。マルクスの理想の社会が、個人個人の特殊利益と社会全体の共通利益との間に矛盾のない、闘争なき社会であるのに対し、スペンサーが理想とする社会は、自由で豊かな協調のすすんだ社会である。スペンサーは、闘争そのものは個人の幸福にとって負の存在であることを認めつつも、闘争や競争の全くない社会が生き延びることはありえないとし、またそうした社会が必ずしもよい社会だとは考えていない。スペンサーは、「闘争なき社会」をめざす社会主義者の心情に一定の共感を示しながらも、彼らの奉じる「才能に応じて生産し、必要に応じて分配する」というベラミーの原理を次のように批判し、その実行不可能性を予言する。

社会主義者は、世代を越えて、優れた者の物的福祉を犠牲にして、劣った者の物的福祉を上昇させ続けるとどのようなことが起こるか問わない。……人々が集団として、利益と報酬との自然な関係を破壊するなら、彼らは自分自身を滅亡させる。彼らは、生の営みに不適合な者の増加を通しての緩やかな衰退という悲惨への道を歩むか、良きものの犠牲のもとにつまらない者を育むという愚かな政策を採らない、他の集団によって圧倒されてしまうだろう

(Ibid. : 571)。

適者生存の「自然法則」をゆがめ、社会内における競争を廃棄したところで、競争そのものから抜け出せるわけではない。社会はほかの社会との競争状態にあって、闘争なき社会もまた外部との闘争から抜け出すことはできないのだ。そうスペンサーは信じていた。

デュルケームの「アノミー」の概念

デュルケームの分業の否定的影響に関する理論の一つの特徴は、それが社会の問題状況として、社会的連帯の阻害、すなわち葛藤状態だけしか認めず、その原因となるアノミーだけを、対処すべき問題としていることである。相互依存に関しては、社会的連帯を形作る基礎として肯定的に評価し、労働の心理的側面は、アノミー状況かどうかに従属するとする。そして、経済的側面に関しては、社会的に形成される期待と現実の食い違いだけがアノミー生成に直接つながるため問題であるとし、過度の経済的期待をうながすような右派・左派双方の経済学を批判するのである。では、彼の分業の否定的影響の分析を詳しく見ていこう。

はじめに述べたように、彼の分業の否定的影響に関する立場は、比較的初期の『社会分業論』(1893)と、しばしば中期に分類される『自殺論』(1897)とで、根本的に変わってしまっている。

『社会分業論』(1893)では、分業の、相互依存を通じた社会的連帯の創出という、社会的機能ばかりがもっぱら強調され、その否定的影響はすっかり無視されている。確かにそこで彼は、分業の異常形態について語り、そうした異常形態の分業が、闘争状態という否定的影響を与えることについて語ってはいる。しかし、こうした否定的影響の原因は、人々が専門化し、互いにとって必要な仕事を分担しあうという、分業という事実そのものにあるのではなく、あくまで、無規制や拘束といった、その分業のおかれた異常な状況にあるのだとされているのである (Ibid. : (下) 195)。

一方、『自殺論』(1897)および、それ以降書かれた『社会分業論』第二版への序文では、まさに「無規制的分業」や「拘束的分業」(Durkheim 1893 : (下) 197-256)といった分業の異常化の原因がアノミーであることが明らかにされ、そして、分業の発達こそが、アノミー生成の一原因であるとされる (Durkheim 1893 第二版序文 : 邦訳 (上) 25)。すなわち、経済活動における十分な道徳的・法的規制の欠如こそが、「弱肉強食の物理的法則」の君臨するに任せ、「無規制的分業」だけでなく、弱者に従属を強いるような「拘束的分業」がはびこる原因になっているのだとするのである (Ibid. : 邦訳 (上) 25-6)。アノミー状況下で、ある種の規制があったとしても、それは「弱肉強食の物理的法則」による自然的規制であって、社会的な同意によるようなものではないために「拘束的分業」がおこってしまうのだというのだ。

ゆえに、「無規制的分業」も「拘束的分業」も a) どちらもアノミーが原因であり、b) どちらも社会的連帯を阻害するという意味で同一だということになる。繰り返しになるが、デュルケームは、社会の目的を、社会的連帯の拡大と社会的葛藤の減少だと捉えており、分業の否定的影響に関しても、社会的葛藤だけを問題としている。デュルケームにとって、社会の目的とは「弱肉強食の物理的法則をより高次の法則に従属させて、人々の間の闘争を廃棄し、または少なくとも緩和する」ことなのである (Ibid. : 邦訳 (上) 26)。

このように、デュルケームは『社会分業論』第二版の序文で、「無規制的分業」や「拘束的分業」といった分業の異常形態の原因となるのはアノミーであるとしているが、それではアノミーの原因は何なのか？ そう、『自殺論』によれば、分業の発達こそがその間接的原因なのである。

しかし、アノミーの原因について述べる前に、アノミーとは何なのか、簡単に説明しておくべきだろう⁵⁾。

経済的好況期と不況期の双方において、自殺率の上昇が見られることに着目し、デュルケームはこうした統計的傾向をアノミーによって説明した。平常時には、社会は、個人のそれぞれに合った欲求満足のレヴェルや、しかるべき社会的な位置づけを、教えることができる (Durkheim 1897 邦訳 305)。

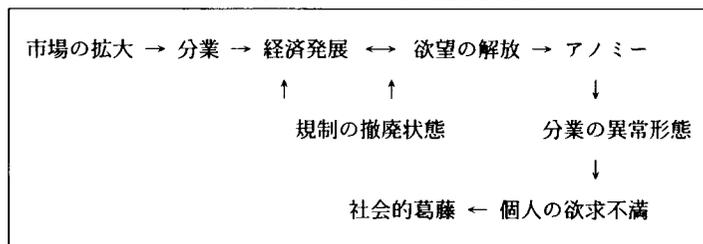
このような個人の欲求のコントロールによって、社会は個人の欲求を満たし、その結果として、不要な社会的葛藤をなくすのである。しかし、好況・不況期においては、満足すべき基準の突然の変化によって、こうした社会的コントロールは効果を失ってしまう。これが典型的なアノミーである。人々は満足を得られないようになり、その結果、社会的葛藤が拡大する。こうした事態が、自殺率を上昇させるとデュルケームは言うのである (Ibid.: 310-1)。

ところでこの例ではアノミーは経済変動にしたがって起こっており、ゆえにそれは自殺率の変動は説明するが、その恒常的要因とは考えられない (Ibid.: 313)。しかし、デュルケームはアノミーが慢性的な状態となっている領域を見つける。「商工業の世界」がそれである (Ibid.)。農業などに携わる者に比べ、この領域に携わる者の高い自殺率を、デュルケームはこの領域における無規制状態と経済発展の影響だと解釈する。

こうして産業によってあおり立てられた欲望は、それを規制していたあらゆる権威から身を解き放つことになった。……この欲望の解放は、産業の発展と市場のほとんどとどまることをしらない拡大によって、いっそう拍車をかけられた。生産者が、自分の生産物を直接の隣人に売りさばくことしかできなかったかぎりでは、得られるわずかな利益は、欲望を特に刺激することもなかった。しかし、今やほとんど全世界の顧客を相手にすることも期待しうるようになっては、この限りなくひらかれている前途をまえに、どうして情念はかつてのような制限を甘んじて受け入れることができよう (Ibid.: 315)

さて小原 (1997a) でも見たように、デュルケームは『社会分業論』(1893) で、市場の拡大は分業の発展を導き、分業の拡大は、経済的発展を導くことを認めている。ゆえに上記の『自殺論』(1897) からの引用と、デュルケームの『社会分業論』初版、そして第二版への序文での著述を組み合わせれば、分業の発達から、社会的葛藤の拡大 (ならびに個人の欲求不満) への次のような図を描くことができる。

図1：分業とアノミー、社会的葛藤



この図から明らかになるのは、分業の社会的機能についての、『社会分業論』(1893) におけるデュルケームの再三の強調にもかかわらず、『自

殺論』(1897)では、分業が間接的にアノミーを引き起こし、最終的には社会的葛藤を産み出すひとつの要因となっていることを、デュルケームが事実上認めていることである。しかし、それは図からもわかるように、経済発展が十分に規制されていないという条件で、ということになる。

このように、デュルケームの図式における、分業から社会的葛藤へというその否定的影響への経路は明らかになった。マルクス同様、こうした社会的葛藤を少なくとも減少させねばならないと考えるデュルケームにとって、この図から、とりうる方策は二つしかないことは明瞭だろう。すなわち、マルクスが考えたのと同様、分業を廃棄するか、あるいは経済への規制を強めるか、どちらかということになる。しかし分業の別経路での社会的機能を認めているデュルケームにとって、分業の廃棄は当然認め難い。よって、よく知られているように、彼は『社会分業論』第二版の序文で、職業集団の再興による経済活動のコントロールを訴えることになるのである。

では最後に社会的葛藤という側面以外の、分業の否定的影響について見ておこう。これまで分業の否定的影響として、社会的葛藤の側面だけを見てきた。しかし、デュルケームが、分業の否定的影響の個人的側面を無視していたというわけではない。『社会分業論』(1893)で「(個人の)幸福は(社会の)健全状態の指標である(邦訳(下)29)」と述べていることからわかるように、個人の幸福という次元も、社会的状況の一つの指標としては重要視されているのである。これは『自殺論』(1897)においても同様で、そこで彼は社会的状況に対応する、自殺の個人的表現形態の詳細な分析を行っている(Ibid.邦訳345-371)。実際、これまで述べてきたアノミー状況において、アノミーと社会的葛藤をつないでいるのは、個人の期待とその充足との乖離なのである。そうしたアノミー状況における個人の欲求不満は、それそのものとして重要視されているわけではないものの、社会的葛藤状態に直接つながるものとして、デュルケームは明らかに重要視している。それは彼が、そうしたアノミー状況にある個人の心理を描写する言葉からも明らかであろう。

マルクス・スペンサー・デュルケームの比較

最初に、彼らの分業の否定的影響に関する分析の共通点から見ていこう。まず分業の与える影響に関して、彼らの全てが、次の点に関し同意している。

1. 分業は、(少なくともある条件下で)社会的闘争を拡大する
2. 分業は、人々の相互依存を拡大する
3. 分業は、(少なくともある程度まで)社会の経済的生産力を拡大する

ただし、2と3は、この三人の全てが否定的影響と捉えているわけではない。小原(1997b)でも見たように、デュルケームは2を肯定的影響と捉え、マルクスとスペンサーは3を肯定的影響と捉えている。これら以外には、分業の定義からいって当然だが、

4. 分業は、専門化を導く

として、マルクスとスペンサーはこれも否定的に捉えている。デュルケームだけは、彼らと異なり、専門化そのものは問題でないとする。

最後に彼らは、これらのうち分業の否定的影響と認めたものについては

5. 個人の心理的苦痛をとまなう

ことも同時に認めている。

このように、小原（1997b）での肯定的影響に関する結論も併せ見れば、この三人は分業の影響そのものについて、現象面では大方合意していると考えて良い。しかし、彼らは分業が引き起こしている現象についてはほぼ同意しつつも、それに対する評価と対処に関して、全く異なる三つの診断書を書いているのである。すなわち彼らは、与えられた分析対象に関してほぼ同じ土俵に立って、それぞれ異なる理論を武器に戦っていると考えて良い。

まず1から見ていこう。彼らはともに、分業が現在与えられている条件下で社会的闘争を拡大していることを認め、しかもそれが問題であるとしている。

ただしスペンサーは、そうした問題があることを認めつつも、それが社会進化と社会そのものの生存にとってどうしても必要な犠牲であり、ゆえに解決策はないとしている。一方マルクスは、こうした社会的闘争状態は、第一に解決すべき問題であるとしつつも、一時的な社会的葛藤の拡大が、葛藤なき社会を達成する手段として、それを認めている。これに対し、デュルケームはマルクスのというような階級闘争そのものが、解決すべき問題であるとしているのである。

スペンサーの社会主義者に対する反論はすでに見たとおりであるが、当然これはデュルケームに対しても向けられうるだろう——すなわち「闘争なき社会」などありえないのだと。これに対する（中期以降の）デュルケームの反論は、「法的・道徳的な社会的合意に基づいた競争と、アノミー状態での社会的闘争とは区別すべきだ」というかたちでまとめることができるだろう。実際『社会分業論』第二版への序文で、「弱肉強食」的闘争が徹底的に忌避される一方、職業集団という秩序にのっとった集団的利害にもとづく闘争が、個人間レヴェルでの結合をもたらすがゆえに正当化されるのを見てとることができる（Durkheim 1893 邦訳（上）37, 45-6）。

このように見てくると、1の社会的闘争に関してだけなら、デュルケームは、スペンサーの批判をはねのけているように見える。しかし、このような、デュルケームによる個人の「特殊利害」の「一般的利害」への従属という道徳的解決（Durkheim 1893 邦訳（上）43）そのものが、2の相互依存に関する、デュルケームとスペンサーの対立を導くのである。

では次に2の相互依存について見ていこう。まず三人の全ては分業の発達の人々の相互依存を拡大することに同意している。

しかし、こうした事態に対し、マルクスは自由を重んじる立場から、共産主義社会建設によって分業を廃棄し、資本主義社会特有の相互依存から人々を解放しようと訴えた。これはまた同時に、ある人の社会的生が、その個人的生の手段となってしまうという現状から、個人的生と社会的生とが同時になりたつような状態へと回復させることである。

一方、デュルケームは『社会分業論』（1893）で、社会的連帯を促進するこうした相互依存の拡大を積極的に評価した。さらに同第二版への序文では、アノミーによる社会問題の解決のために、分業に基づく相互依存だけでなく、職業集団再興によるさらなる相互依存の拡大と社会による個人のコントロールを目指したのである。

この二人の違いは明瞭だろう。相互依存についての立場のみならず、社会と個人の正常な関係についての立場が完全に正反対である。デュルケームは、分業の発達した社会における、社会と個人の対立状況を常態と見、「特殊利害を一般利害に従属させることは、あらゆる道徳的活動の根源そのものである（Durkheim 1893 邦訳（上）43）」と述べ、そうした社会的コントロールの

必要を繰り返し訴えている。一方、マルクスは「社会を再び抽象物として個人に対立させて固定することは、何よりもまず避けるべきである (Marx 1893 邦訳 134)」と述べ、個人の本来的な社会性を主張している。

スペンサーは、この二人のいわば中間をいく。彼はマルクスと同様、分業による専門化が、相互依存の中で、人々の実質的な自由を奪っているのを認める一方で、相互依存が、平和的関係の基礎となり、軍国主義的な強制的協調から、産業主義的な自発的協調への変化を導くと考えている。スペンサーは、こうした自発的協調を支持するような、個人の進化も重要視し、それによって人々は意識レヴェルで最も自由になり得ると考える。すなわち、マルクスとは正反対に、このような種類の、社会から個人への適応化の圧力を、個人をより自由にするものと捉えているのである。こうした社会から個人への適応淘汰の圧力の結果、人々は次のような方向へと近づいていく。

究極の人間とは、個人的必要性が公的な必要性と一致するものことである。彼は、自分自身の本性を自発的に発現することによって、そのまま社会の単位としての機能を果たすようにふるまうのである (Spencer 1896=1975: 601)

個人の特殊利益と社会の共通利益の矛盾の解決のために、マルクスが、社会の変革のみを訴えたのに対し、スペンサーはそれが社会に適応する個人の変革によっても可能であると考えたのである。

ではスペンサーとデュルケームの違いはどこにあるのか。ここで1に関する段落の末尾に戻るが、スペンサーとデュルケームの決定的な違いは、スペンサーが個人の自由を常に優先して考えているのに対し、デュルケームが社会的葛藤の押さえ込みを常に優先して考えていることである。デュルケームが、アノミーの問題を解決するための切り札とした、職業集団の再興は、スペンサーの枠組みからいえば、産業主義から軍国主義への後退にはかならない。例えば、デュルケームは職業集団をもって、かつての家族が果たしていた個人の結束の機能を代替させようと考えているが、そうした機能のうち、「共通の危険に対抗して闘うためにまたはもっぱら団結するために団結する欲求 (Durkheim 1893 邦訳 (上) 45-6)」などは、まさにスペンサーの考える軍国主義社会の基本的特徴と一致するのである。

次に3の経済的発展についてだが、マルクスとスペンサーはこれを肯定的に捉えている。これについて詳しくは小原 (1997b) を参照してほしい。これに対し、さきに見たとおり、デュルケームは分業のこうした経済的影響を、アノミーの間接的原因として注意を促し、経済発展の最優先を正当化する(スペンサーと立場に近い)古典経済学およびマルクス主義経済学の双方を厳しく批判した (Durkheim 1897 邦訳 315)。すなわち、スペンサーやマルクスのくみする経済発展肯定派の主張が、経済の規制撤廃を正当化し、アノミーを引き起こしているというのである。

最後に、4の、専門化の直接的影響だが、マルクスとスペンサーはこれを否定的影響と捉えている。人の能力の全的な活用を、人の幸福と捉えるスペンサーにとって、専門化が問題となるのは当然であろう。マルクスは、この否定的影響を「類的存在からの疎外」の項で見たような共通利益と特殊利益の矛盾という観点から捉えている。スペンサーはこの問題の解決を個人の進化に求め、マルクスは社会の変革に求めている。

こうした彼ら、特にスペンサーのような人間の全人格的発達を重視する立場に対し、デュルケ

ムは『社会分業論』（1893）冒頭の序論で反論を加える。こうした専門化が問題となるかどうかは、社会の道德観に依存し、道德観は社会の欲求によって変化するというのである。そして発達した社会においては、専門化の発達はその社会の欲求に合致しており、事実、デュルケームが『社会分業論』を書いていた頃には、専門化は道德的に正しいとされる方向に変化していると指摘する。ゆえにデュルケームが考える専門化の問題の解決方法は、専門化の程度を下げるのではなく、専門化が本来果たしているはずの社会的機能、すなわち相互依存を通じた社会的連帯の増強を、いっそう徹底させることにある。

分業は、個人がその現在果たしている作業に閉じこもることではなく、個人が、彼と協調している相手から目を離すことなく、それらに働きかけ、それらから働きかけられることこそを、前提としている。……だから彼の活動がどれだけ専門化され、一様であったとしても、それは知的存在の活動である。なぜなら彼はその活動の意味を知っているのだから（Durkheim 1893 邦訳（下）224 訳に変更あり）

ここでデュルケームが無視しているのは、資本主義社会において、ある人の「活動の意味」を伝えるものが多くの場合、貨幣であるということである。ハイエク（1948）の指摘を待たずとも、価格の重要な機能は、需要と供給の間をつなぐ情報を伝達することにある。高度資本主義社会では、市場における価格のありようを通じて、人はそれぞれの活動の社会における「意味」を知り、その活動を調整している。ゆえに、デュルケームのいう「分業の正常形態」においてさえも、マルクスが考えるように、抽象化され疎外された貨幣の力が、個人を支配し、「類的存在」から疎外するということはおこりうるのである。

結 論

最後に結論を述べるとすれば、それは、マルクス・スペンサー・デュルケームの三人が分業の問題を語る時、彼らはほぼ同じ状況を見て、それを分析し、そこに今度は様々な理論的評価を加え、その評価に従ってまた様々な解決策を提示したということである。彼らを分けたのは現状そのものの認識ではなく、それに対する彼らの立場、すなわち、彼らの社会的闘争に対する立場、相互依存に対する立場、個人の社会的コントロールに対する立場だったのである。

少なくとも彼らの分業論を見る限り、これらに関する立場——より一般的な言葉で言えば、自由と平和に対する彼らの立場——が彼らが訴える価値観の基底となっており、この点に少しでも触れるような論争が、彼らの間で行われるとすれば、平行線をたどるよりないことは明白であろう。ゆえに Parsons（1937）に代表されるような収斂的社会学史観の限界もまた明らかになる。少なくとも分業の影響に関して、デュルケームと、マルクス・スペンサーとの間の社会理論の違いとは、マルクス・スペンサーがそれぞれ代表する理想主義と合理主義が、より高いレベルで統合されているということにあるのではない⁶⁾。そうではなく、マルクス・スペンサー・デュルケームの展開した分業論は、共約不可能な価値観の違いに基づく、並列的な関係にあるのである。

註

- 1) これについては異論もある。それは『社会分業論』ですでにデュルケームは分業が社会的連帯を減少させることを認めているとしているとするもので、Alexander (1982) などがその代表例だ。これは端的に言って、デュルケームの『社会分業論』の議論が完全な失敗に終わっているとするものである。
- 2) 但し Althusser (1969) など、ギデンズのこうした解釈に対立するような解釈も多く存在する。
- 3) スミスにおいては、「労働価値」が価値として社会に流通できるのは、それがつらいからであり、皆が、労働をしなければそれにこしたことはないと考えたからだ (Smith 1776 邦訳第一分冊 151)。しかし、マルクスは労働の本質に関するこのような仮定を取り払ってしまった結果、労働価値に別の基盤を探さねばならなかった。それが労働の再生産費用説である。
- 4) 実際マルクスは、労働者の疎外の裏返しとして、資本家階級もまた別のかたちで疎外されると考えている (Marx 1844 邦訳 106)。
- 5) ここでいう「アノミー」は『自殺論』以降の“anomie”を指す。“anomie”の意味の変化については、Olsen 1965を参照。
- 6) 肯定的影響に関しても同様の結論がえられる。小原 (1997b) を参照。また、Parsons (1937) に対する、より一般的な視点からの反論は Levine 1989を、Parsons (1937) に関する議論を最もよくまとめたものとしては Camic (1989) を参照。

参考文献

- Alexander, J. 1982 *Theoretical Logic in Sociology II*. Berkeley: University of California Press
- Althusser, L 1965 *Pour Marx*. Paris: Maspero (『マルクスのために』河野健二他訳, 平凡社, 一九九四年)
- 新睦人他 1979『社会学のあゆみ』有斐閣新書
- Aron, R. 1965-7 *Main Currents in Sociological Thought I, II*. New York: Basic Books (『社会的思考の流れ I, II』北川隆吉他訳, 法政大学出版局, 一九七四~八四年)
- Borlandi, M. 1993 Durkheim Lecteur de Spencer. *Division du Travail et Lien Social*: 67-109
- Boudon, R. and Bourricaud, F. 1984 Herbert Spencer et L'Oubrié. *Revue Française de Sociologie* 25: 343-351
- Corning P. 1982 Durkheim and Spencer. *The British Journal of Sociology* 33: 359-382
- Camic, C. 1989 Structure After 50 Years. *American Journal of Sociology* 95: 38-107
- Coser, L 1971 *Masters of Sociological Thought*. Orlando: Florida: Harcourt Brace Jovanovich
- Cuvillier, A. 1948 Durkheim et Marx. *Cahiers internationaux de sociologie* 4: 75-97
- Durkheim, E. [1893] 1926 *De la Division du Travail Sociale*. Paris: Alcan (『社会分業論』(上・下) 井伊玄太郎訳, 講談社学術文庫, 一九八九年)
- _____. [1897] 1960 *Le Suicide*. Paris: Presses Universitaires de France (『自殺論』, 宮島喬訳, 中公文庫, 一九八五年)
- Feuerbach, L. [1841] 1984- *Das Wesen des Christentums (Gesammelte Werke)*. Berlin: Akademie-Verlag (『キリスト教の本質 (上・下) フォイエルバッハ全集 9・10』船山信一訳, 福村出版, 一九七五年)
- Giddens, A. 1971 *Capitalism & Modern Social Theory*. Cambridge: Cambridge University Press (『資本主義と近代社会理論』犬塚先訳, 研究社, 一九七四年)
- Hayek, F. 1948 The Use of knowledge in Society. *Individualism and Economic Order*. London: George Routledge & Sons (『社会における知識の効用』 in 『市場・知識・自由』田中真晴・田中秀夫編訳, ミネルヴァ書房, 一九八六年: 52-76)

- Heredia, R. 1986 Transition and Transformation. *Sociological Bulletin* 35: 29-43
- 廣松 渉 1969『マルクス主義の地平』頸草書房
- Hughes, J., Martin, P., Sharrock, W. 1995 *Understanding Classical Sociology*. London: Sage
- Jones, R. 1974 Durkheim's Response to Spencer. *The Sociological Quarterly* 15: 341-358
- Knapp, P. 1986 Hegel's Universal in Marx, Durkheim and Weber. *Sociological Forum*: 586-609
- 小原一馬 1997a「スミス、マルクス、スペンサー、デュルケームによる社会的分業の分析——原因編」未発表
- _____. 1997b「マルクス、スペンサー、デュルケームによる社会的分業の分析——肯定的結果編」『教育・文化・社会(4)』: 53-66
- Levine, D. 1989 Parsons' *Structure* (and Simmel) Revisited. *Sociological Theory* 7: 129-136
- _____. 1995 *Visions of the Sociological Tradition*. Chicago: University of Chicago Press
- Lukes, S. 1967 Alienation and Anomie. in P. Laslette and W. G. Runciman eds., *Philosophy, Politics and Society vol. III*. Oxford: Basil Blackwell: 134-156
- _____. [1973] 1985 *Emile Durkheim*. Stanford: Stanford University Press
- Marx, K [1844] 1932 *Ökonomische-Philosophische Manuskripte aus dem Jahre in Karl Marx-Friedrich Engels historisch-kritische Gesamtausgabe 1-3*. Berlin: Marx-Engels Verlag (『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳, 岩波文庫, 一九六四年)
- _____. [1867] 1962 *Das Kapital I*. Berlin: Dietz (『資本論(1)~(3)』向坂逸郎訳, 岩波文庫, 一九六九年)
- Marx, K and Engels, F. [1846] 1933 *Die Deutsche Ideologie in Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe 1-5*. Moskau: Verlagsgenossenschaft Ausländischer Arbeiter in der UdSSR (『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳, 岩波文庫, 一九五六年)
- Olsen, M. 1965 Durkheim's Two Concepts of Anomie. *Sociological Quarterly* 6: 37-44
- Parsons, T. [1937] 1968 *The Structure of Social Action*. New York: The Free Press. (『社会的行為の構造(1~5)』稲上毅・厚東洋輔訳, 木鐸社, 一九七四~八九年)
- Peel, J. 1972 Introduction in *On Social Evolution*. Chicago: University of Chicago Press
- Perrin R. 1975 Durkheim's Misrepresentation of Spencer *The Sociological Quarterly* 16: 544-550
- _____. 1995 Emil Durkheim's Division of Labour and the Shadow of Herbert Spencer. *The Sociological Quarterly* 36: 791-808
- 佐々木交賢 1996 疎外とアノミー『デュルケーム再考』佐々木交賢編, 恒星社厚生閣: 63-82
- Schumpeter, J. [1908] 1970 *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen National Ökonomie*. Berlin: Dunker & Humblot (『理論経済学の本質と主要内容(上・下)』大野忠男他訳, 岩波文庫, 一九八三年)
- Smith, A. [1776] 1976 *The Wealth of Nations*. Chicago: University of Chicago Press (『国富論1~3』大河内一男監訳, 中公文庫, 一九七八年)
- Spencer, H. [1851] 1972 The First Principles of Ethics (*Social Statics* の部分) in *On Social Evolution*. Chicago: University of Chicago Press: 14-16
- _____. [1896] 1975 *The Principles of Sociology III*. Westport Con.: Green Wood Press
- Turner, J. 1984 Durkheim's and Spencer's Principles of Social Organization. *Sociological Perspectives* 27: 21-32

(博士後期課程3回生, 教育社会学講座)